

安部公房

幽霊はここにいる

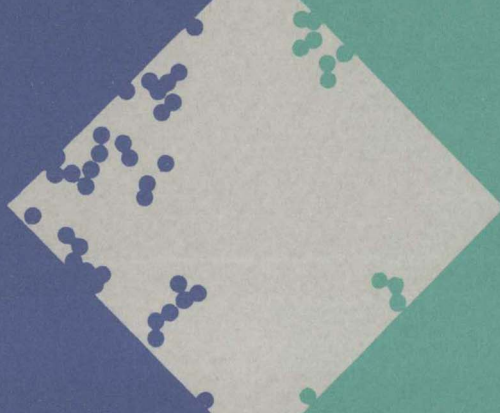
新潮社



安部公房

幽霊はここにいる

新潮社



発行昭和四十六年一月十五日

三刷昭和四十六年四月十五日／価五二〇円

発行者佐藤亮一／発行所株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一／郵便番号一六二

電話東京(03)二六〇・二二一 振替東京八〇八

幽霊はここにゐる

安部公房著



印刷・塚田印刷／製本・新宿加藤製本

乱丁、落丁本はお取替えいたします

© 1971, Kobo Abe, Printed in Japan

幽霊はここにいる

三幕十八景

〔登場人物〕

深川啓介

大庭三吉

大庭ミサコ (娘)

大庭トシエ (妻)

箱山義一 (新聞記者)

市長

鳥居兄 (金融業者)

鳥居弟 (新聞経営者)

まる竹 (土建業者)

老婆 (深川の母)

本物の深川

ファッション・モデル (男、女)

市民A・B・F (男)

市民C・D・E (女)

人夫1・2

幽霊 (姿は見えない)

第一幕

(雨が降っている。傘をさした市民たちの行列……現われて、静かに立去る)

1

(橋の下。——コールテンのニッカをはいた、髪のうすい、五十がらみの浮浪者「大庭三吉」が、たき火にあたりながら、左手に小さな鏡をかまえ、右手にはさみを持って、風体に似合わぬ気取ったコールマンひげをかりこんでいる。

橋の上を、三十二、三の見るからに貧相な男「深川啓介」が、力のない足どりでやって来る。泥んこ道。下の男の真上で足をとめ、空を見上げて舌打ちをする。不安定な姿勢で、片方のゴム靴をぬぎ、さかさにして中の水を、こぼす)

大庭 (見上げて) ばかやろう!

深川 (あわてて) すみません。(下をのぞき、ゴム靴をさし出して見せ) 穴があいちゃってるんですよ。まったく、穴のあいたゴム靴くらい不愉快なものはありませんねえ……まるで、

吸上げポンプをはいて歩いているみたいだ。

大庭 ついでに、もう一つ、排水用の穴をあけときゃいいのさ。

深川 (真面目に) なるほど……面白い考えだなあ。

大庭 ちエッ、何を言ってるやがんだい！

深川 (いっそり乗り出してのぞきこみながら) へえ、そこ、具合よさそうですね。

大庭 ……………

深川 ちよつと、あたらせてもらおうかな……(靴をはき、返事もまたずに、わきの石段から下におりてくる)

大庭 図々しいやつだなあ、何か持ってるのか？

深川 え？

大庭 なにか食うものでも持ってるのかって聞いているんだよ。

深川 ああ、アスピリンなら持っています。

大庭 なに？

深川 アスピリンですよ。

大庭 ばかやろう、誰が風邪かぜひいてるなんて言った！……(ふと氣をかねて) でも、まあ、見せてみな。

深川 (ポケットから取り出して) 風邪ひいてなくなつて、気分がいらいらしているときなんか、いいんですよ。まだいっぱいまっています。

大庭 (受取って、ながめ、しまいこんで) じゃあ、あたんな。

深川 ぜんぶ、とっちゃうんですか？

大庭 (有無を言わぬ調子で) まあ、ゆっくり、あたらせてやるで。

深川 (おずおずと場所をえらびかけたが、ふと大庭の手もとに気づき) あ、鏡ですね！

大庭 ……………？

深川 (言いくそに) もし、かまわなかったら、しまってもえませんか……

大庭 変った野郎だな。(どうしようかとためらったが、結局ハサミといっしょにポケットにしまいこ

み、かわりにばかでかい緑色のハンカチをひきずり出して、鼻をかむ)

深川 すみません、鏡を見ると、頭痛がしてくるんですよ。(大庭の向い側に腰をおろしながら、

ちよっと体をずらして、わきにいる見えない誰かに) 君、ここに……(と、その見えない相手の

ために、場所をつくってやる仕種)

(大庭、ぎょっとして顔をあげる)

大庭 なにをしてるんだ？

深川 (不審そうに)……見えるんですか？

大庭 いや……(息をのんで) 誰か……いるのかね？

深川 (平然と) ええ、幽霊なんですけど……

大庭 (ぎょっとして) 誰の、幽霊だ?!

深川 ぼくの友達。でも、気にしなくていいんです。(幽霊に) 足をあぶるといいよ。(靴をぬぎ、

さかさにして立て、足の裏を干しながら）もう四月だったのに。いやな陽気ですねえ……

（間——）

大庭　どこから、来たんだ？

深川　（笑い）そいつは、ちょっと言えないな。

大庭　（まごつきながら）で、その幽霊とは、いつ知り合ったんだね？

深川　ははあ……そうか……ぼくらのことを気遣い病院から逃げ出して来たと思ってるんですね。

大庭　いやいや……

深川　遠慮しなくていいですよ……

大庭　いや……

深川　でも、彼がここにいるなんてこと、本気で信じちゃいないんでしょう？
大庭　………

（大庭、困惑気味に、耳のうしろにはさんだ吸いさしのタバコに火をつける）

深川　いいんですよ。彼だってそんなこと、気にしちゃいないから……（幽霊に）なあ……

幽霊　………

深川　（通訳して）信じられないのが当りまえだって、彼も言っていますよ。幽霊の存在を簡単

に認めるような奴は、どうせ知能程度が低いにきまっているんだ。

大庭（警戒気味に）でも、あんたには、見えてるんだろ？

深川 もちろんですよ。（幽霊に）え？

幽霊 ……………

深川（通訳して）もし、よかったら、ちょっと触ってみてもいいそうです。

大庭（うろたえ気味に）いやいや……

深川 大丈夫ですよ、どうせなんにも感じやしないんだから、ほら……（と、むりに大庭の手をとって）ここが、顔……

大庭（指先で、おずおずときぐりながら）ほう……

深川 あ、そこは、鼻。

大庭（まるで風呂加減をみるような手つきで）すると、ここらが、腹かな？

深川 ね、なんにも感じないでしょう？

大庭 うーん……（間）……で、これから、どうするつもりなんだい。

深川 ええ、いろいろと……彼に、借りを返さなきゃならないんでね……

大庭 どういう……？

深川（ぶっきらぼうに）人間は、誰だって、死人に借りがありますよ。

大庭 ……………

深川（溜息をつき）しかし、まったく、いやんなっちゃうなあ……なにをするにも、まず金だ。

金がなきゃ、なんにも出来やしないんだ。

大庭 金があつたら、何をするんだね？

深川 (ばつと顔をかがやかせ) 持っているんですか？……ぼくら、とりあえず、死人の写真を、いろいろと買いあつめたいんです。

大庭 なんだって？

深川 (熱心に) 死んだ人の写真ですよ。つまりね、幽霊の身許さがしなんです。直接幽霊の写真が撮れれば一番いいんだけど、まさかそうもいかないし……

大庭 駄目かね？

深川 駄目ですよ、そりゃあ……(われに返って) でも、本当に、金をかしてもらえるんですか？
大庭 とんでもない。金なんか、あるものか！

深川 (がっかりして) やっぱりそうか……(幽霊に対する反応) え？……(四方にぐると頭を下げながら) どうも、すみませんでした。

大庭 何してるんだ？

深川 いや、他の連中まで、つい期待しちゃったらしいんです……

大庭 他の連中？！……

深川 ええ、いっぱいいるんです。ぼくには、彼しきや見えませんが……(幽霊の動作をたどりながら) そこにも、あそこにも、こっちにも……あんたのすぐ後ろにも二人ばかり……いっしょにぼくらの話を聞いているんだって……

大庭 (少々落着きなく、やたらとうなずきながら) なるほど……なるほど……しかし、そういうこ

となら、ことによると、わしら、仲良くやっていけるかもしれませんなあ……

深川 仲良く、ですか？

大庭 (もったいぶって) 仕事の関係上、なるだけ本名は明かさんようにしておるが……よろしい、この際、思い切って言ってしまおう……じつは、わし……北浜の、大庭三吉というものだが……

深川 (けろっとして) あ、そうですか。ぼく、深川啓介と申します。

大庭 聞いたことないかね、わしの名前？

深川 さあ……？

大庭 いや、知らなきや結構。しかし、こう見えてもだね、その道にかけちゃ、ちっとばかり年季が入っているんだ。つまり、その気になりさえすりゃあ、ほら、この石ころだつて、百円や二百円くらいには、すぐにだつてお目に掛けられるつてことよ。でもね、わしは、小っぱけなごまかしは大つきらいさ。でっかい、一流の仕事にしきや手を出しません。だから、今のところは、ちっとばかり落ちぶれて見えるかもしれんが、こりゃまあ、なんというか、一種の保養なんだねえ……

深川 じゃ、発明家ですか？

大庭 (笑い) ヘッ、こいつは面白いことを言う、うまいこと言うじゃないか……しかし、あんたも、若いくせして、なかなかの発明家じゃないですか。幽霊……おまけに、死人の写

真ときた……いや、才能があるね。たしかに、こいつは、もうかりそうですなあ……

深川 (疑わしげに) もうかる？

大庭 うん、もうかるね。

深川 変だなあ、なにか、誤解してるんじゃないですか？

大庭 いいから、いいから、分つてますって……しかし、あえて意見を述べさせていただくと、あんたの幽霊、惜しいかな肝心のところで、もう一つヒネリが足らん。

深川 ヒネリ？

大庭 それじゃ一つお尋ねしますが、その幽霊さんは、男？ それとも、女？

深川 もちろん、男ですよ、(幽霊を振り向き) なあ……

大庭 それはいかん。だから駄目なんだ。幽霊は、あんた、なんと言つたつて女でなけりや……

深川 (幽霊を見て笑いだす) 女？ 君が、女だつてさ。

大庭 (氣を悪くして) 女でなにが悪い。あんた、分つてないんだねえ……

深川 …… (幽霊に) そろそろ行こうか、雨もあがつたようだし…… (腰をあげかける)

大庭 (あわてて) まあ待ちなさい。わしも、事と次第によつちゃ、ちつとくらの金なら工面できんこともないで……

深川 (顔をかがやかせ) 本当ですか？!

大庭 旅は道づれ世は情け。

深川（感動的に）ありがたいなあ……（幽霊に）よかったな、親切な人にめぐりあえて……（大庭に）人間て、見かけじゃ分らないものですねえ……

（二人並んで退場——）

2

（北浜市にある、「北浜新報」の社長室。

中央にテーブル、椅子五つ、うしろの壁に、整理棚と大きな北浜市の地図。

社長の鳥居弟が徹底的にだらしない格好で、椅子により掛り、耳掻きで耳の穴をほじっている。あわただしく「まる竹」が乗りこんでくる。市一番の土建業者で、見るからに田舎紳士風）

鳥居弟 ああ、まる竹さんか……

まる竹（せきこんで）ニュースだ、ニュースだ、新聞屋さん！

鳥居弟 私はいま、この書物を研究しておったんですがね……「投資経済論」……（枕がわりにしていた一冊の本を手に持ち、高々とかかけてみせる）

まる竹 な、鳥居さん、今日、市長が、五時五十分の下りで東京から戻ってくるちゅうんで、

駅まで出迎えに行つたんだが……

鳥居弟 それはいい心掛けだ。で、この本の面白さはだね、都市の発達につれて周辺の地価が上って行く、その上り方の方法を説明してある所なんだが……いやあ、面白いもんだねえ。

まる竹 そりゃ、いずれまた聞くことにして……

鳥居弟 いけないよ、まる竹さん、学問を馬鹿にしたりしちゃ。

まる竹 それどころじゃないんだ、鳥居さん、いま、駄でなあ……

鳥居弟（黙殺して） よろしいかね、そもそも土地の値段というものはだ、土地所有者と、政治権力との……

まる竹（苦い顔で、きめつけるように） 大庭三吉を見たんだよ、わしは！

鳥居弟（ギョツとして） 大庭?!

まる竹（たたみかけるように、うなずいて） わしが、こう、改札口のところに待っておった……

すると、ホームの方から、腹をすかしたような年寄りと若いのが二人、ふらふらやって来たと思ひな……はて、見おぼえがある……その、年寄りのほうだ……誰だったわけか？……行きちがつてから、その後ろ姿を見て、はっと思ひあたったのさ。ありゃア

……

鳥居弟 大庭三吉か？

まる竹 そのとおり。